

パンデミックの絶望を救う日本語クラス

武田 泉*

パンデミックによって大学の授業が対面からオンラインに切り替わり、先行研究には主に学生数の動向や経済的な影響、オンライン授業を効果的に行う方法などが中心に存在する。本稿では授業方法の変化という技術論ではなく、学習者が個人として過酷な経験をどのように乗り越え、成長していったのかという存在論的な学習として捉え、米国大学で日本語を学ぶある大学生3名に焦点をあて、インタビュー調査を行った。調査のゴールは、インタビュー結果から「絶望を乗り越える学習」を見つけ出しプロセスを分類することであった。絶望的な状況や葛藤をはらんだ経験にどのようにやりくりしながら自己形成するのかという点に人間の主体性を考える重要な要素があると考え、筆者はこのパンデミック中にオンライン授業を経験した学習者たちが個々の絶望的な状況にどのように向き合ってきたのかを調査し、その中から人間の「エージェンシー」や主体性を明らかにした。

キーワード:パンデミック, 絶望, 日本語教育, 日本語クラス, エージェンシー

はじめに

本稿ではパンデミックに際した日本語教育について、授業方法の変化という技術論ではなく、学習者が個人として過酷な経験をどのように乗り越え成長していったのかという存在論的な学習として捉え、米国大学で日本語を学ぶある大学生3名に焦点をあて、インタビュー調査を行った。そのインタビュー結果から「絶望を乗り越える学習」を見つけ出しプロセスを分類することが研究のゴールである。彼らの絶望的な状況や葛藤をはらんだ経験にどのようにやりくりしながら自己形成するのかという点に、人間の主体性を考える重要な要素があると考え。そこで筆者はこのパンデミック中に日本語教育におけるオンライン授業を経験した学習者たちが個々の絶望的な状況にどのように向き合ってきたのかを調査し、その中から人間の「エージェンシー」や主体性を明らかにする。

*教育学研究科 博士課程後期3年の課程

1. コロナ禍における米国大学の状況

COVID-19(以下、コロナ)の感染防止のため、学生は自宅または個室での閉鎖的な生活環境となり、先が見えない不安や期待していた大学生活を送れない苛立ち、そして感染への恐怖など、精神的に苦しんだ者は多かったようだ。コロナは米国大学にも様々なレベルで影響を及ぼした。Cameron ほか (2021) は、2019-20 National Postsecondary Student Aid Study (NPSAS:20) という資料で米国大学の在籍学生数や財政的な影響を調査し、87%の学生が入学や受講登録に関して何らかの混乱や変更を経験し、そのうちの84%が一部または全てのクラスがオンライン授業に切り替わったとしている。2年以下の私立の教育機関に在籍している学生のうち22%は休学を申請した。パンデミックにより経済的なダメージを経験したのは、学生全体の40%にも及び、黒人の学生、ヒスパニック系またはラテン系の学生、アメリカ先住民、アラスカ先住民、および2つ以上の人種が混在している学生たちは食べ物やその支払いに苦勞し、それは白人やアジア人学生よりも10～14%高い割合だったと示している。Cameron ほか (2021) は他にも学業に関して4.4%が中退、3.8%が休学したことを示している。大学を中退した学生の割合は、黒人学生では全体の7.2%で、白人学生の3.4%の2倍以上。また、年齢グループ別で見ると、24歳以上のグループでは6%強が退学したのに対し、15～23歳のグループでは7.7%だったと報告している。

福留ほか (2022)はこのパンデミックが米国大学にもたらした影響をまとめていて、経済的な損失や支援、外国人留学生数の推移や受け入れの動向、学寮に関する影響などを報告している。その中で、大学組織のブランド力は強くなる一方で、大学における教育やサービスの根本において革新的な変化は起こっていないとし、パンデミック中のオンライン授業への切り替えや学生からの多額の投資に対して説明責任を果たせず、高額な教育の正当性が担保されないと指摘している。また米国の大学は肥大した財政の維持と安全確保のジレンマに陥っていると述べている。

2. コロナ禍における日本語教育

このようにパンデミックは、環境を大きく変えることによって学習者に重大な影響をもたらした。人間の学習にとって環境は大切な要素である。それは教科書や学習教材が揃っている、教師がいるという物理的な環境ではなく、精神的に安心して学べる環境も意味しているのである。

実際、コロナ禍以前から日本語教育は学習者同士が自己効力感をもち協働的に学ぶことのできる環境を作ろうとしてきた。その代表例がSocial and Emotional Learning (SEL)であろう。Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (CASEL)によると、SELは5つの社会的、感情的な能力である。教室活動だけではなく、学校、家庭、コミュニティなどの学習者の生活環境がこの学習に影響を及ぼすとされる。アメリカの教育現場では、SELが大きなトレンドの1つとなっている。アメリカには、10代の若者の21%が学校でいじめられた経験があり、17%の生徒が真剣に自殺を考えたことがあるという調査結果もあるが (Brener, 2013)、こうした教育問題に対してSELの効果が期待されてきた。例えば小泉 (2020) は、米国では人種や文化的背景の違いから

くる教育上の問題に対して、間接的ではあるがSELの効果がエビデンスとして示されていると報告している。

つまりパンデミック以前から、日本語教育ではSELが重視されはじめており、学習者の感情的能力の向上を支援したり、そのための協働的な学習環境の重要性を強調したりするような授業実践が展開されてきていた。その点、今回のパンデミックは、SELを基盤とした日本語教育の試金石でもあったといえる。では、実際にパンデミックによる生活環境の変化は、日本語教育ならびに学習者にどのような影響をもたらしたのだろうか。

まず日本における日本語教育を見てみる。ヒューマンアカデミー(2021)は、このパンデミック中の日本語教育の変化について取り上げ、パンデミックがもたらしたポジティブな影響として、オンライン学習の発展・進化があると述べている。例えば、オンラインの学習サービスが注目されるようになり、アクティブラーニングや協働学習などの教育方法をデジタル空間で再現させようとする取り組み、課題解決が行われるようになったという。佐古(2022)はこの日本国内の急速なマルチメディアを用いたオンライン授業は、日本人学生だけでなく、日本語学習者にも様々な不安を与えているという。日本語学習者を対象に行った調査から、日本語学習者が日本人学生と日本語でコミュニケーションをとることに不安や困難を感じ、話をするために何からの心理的な壁が存在するとまとめている。そのため、日常生活に関連した話題を積極的に取り入れ、学習者の自発的な参加を促した授業作りが求められているという。

次に国外での日本語教育を見てみる。保坂ほか(2021)は、海外の日本語教育現場では授業のオンライン化がどのように進められたのかをまとめている。保坂(2020)は対面授業とオンライン授業を同じ形ではなく同じ価値にすること、言い換えると、方法は違っても同じ学習ゴールに到達することを目指すとしている。

しかしながら、オンライン授業では特に孤独感やストレスなどを強く感じるものが指摘されてきている(CASEL, 2017)。このような孤独感やストレスを軽減するために、この数年で様々な工夫がなされてきた。赤堀(2020)は、オンライン授業で最も大切なことは教師や学習者同士の存在感(プレゼンス)を高め、人と人とのつながり、仲間同士の連帯感が生まれるようにすることだと指摘し、それを「プレゼンス理論」だと定義している。保坂ほか(2021)では、この「社会的存在感」とそれを支える「教授的存在感」を合わせて「プレゼンス理論」と呼び、オンライン学習環境における教師や他の仲間、自分自身の存在感ならびに教師の方向づけが学習満足度を高め、連帯感の醸成、相互交流の質と量の向上、学習の継続学習効果をもたらすものと捉えた上で、海外の4つの事例を紹介している。結果、その4つの事例で目的に則した相互交流を取り入れており、その中に社会的存在感、そしてそれを支える教授的存在感を見出すことができたと報告している。またオンライン上でも「相手がそこにいる」と感じ、自ら発信することにより自分の存在感を投影していたとまとめている。

このように先行研究にはパンデミック中の対応として、対面授業からオンライン授業への切り替え方法やICTを活用したアクティブラーニングの方法、SEL要素を含めたラーニングコミュニ

ティーを作るテクニックなどが中心として存在する。

3. 本研究の視点の特徴と目的

上記で述べたプレゼンス理論で示されているのは、パンデミック中のオンライン授業にとって重要なのは学習者の存在そのものを相互に確認し合う学習だということである。そこで本研究が焦点をあてるのも、日本語教育の方法論というよりもパンデミックの日本語教育において達成された存在論的な学習の様態である。このような存在論的学習に着目することには次の2つの利点がある。

第一に、日本語教育と学習者の主体性との関係をより深く描くことができる。ここでいう主体性とは、授業に積極的に参加しコミュニケーションをとるという意味での主体性よりは、人間が自らの人生をどのように主体的に自己形成するのかという、個人の生き方に関わる主体性を意味している。ジャービス (2020) は、ロジャーズに依拠しながら「総体としての人間 (the whole person)」という用語を用いて、人間の学習の全体性を描くことを重要視しているが、本研究も授業における主体性ではなく人間としての全体性に基づく主体性に注目する。

第二に、パンデミックで直面した過酷な経験それ自体をその人自身の存在に関わる学習のプロセスとして描くことができる。ジャービスは学習とは人間の変容がその個人のバイオグラフィーに統合されていくプロセスであるとしている。ジャービスによれば、このプロセスにおいて重要なのは「断絶 (disjuncture)」だという。「断絶」とは「自分の過去の学習 (つまり個人のたどってきた歴史 [biography]) に基づいた認識と、実際に直面している世界との間に実感されるギャップである」(ジャービス, 2020, p.128)。このような「断絶」に直面することで人間は学習するという。すなわち「本当に私たちが学ぶのは、何かをきっかけに世界を当然視できなくなり、『なぜ』『何のために』『どのように』と疑問をもったときである」(ジャービス, 2020, p.126)。パンデミックは、まさに「断絶」の経験として個人に現れたといえる。人間の学習にとって断絶や葛藤の経験の意味が大きく、現実とのギャップをどう乗り越えるのかというところに学習が生じる。

この「断絶」はつまり「絶望」とも言える。Beck (1972)によると、絶望感 (hopelessness) は抑うつのもっと重要な構成要素であり、Stotland (1969) は「自己の将来に関する否定的な期待」と定義している。言い換えれば、自分の将来に望みがないという自己認知である。Beckら (1974) は、成人の絶望感を測定する尺度を開発し、妥当性の検討を行った。桜井・桜井 (1992) は大学生を対象に、その絶望感尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討している。しかしながら、学習者がこのパンデミックの時代に生き、その中であらゆる経験について葛藤しながらもどのように受け入れ自身の成長につなげていったのかということを質的に、また総合的に描くということは研究としてまだ十分になされていない。

これらの経緯から、本稿ではパンデミック時の学習について、対面からオンラインという授業方法の変化という技術論ではなく、学習者が個人として過酷な経験をどのように乗り越え、成長していくのかという存在論的な学習として捉える。そして、このような矛盾や葛藤をはらんだ経験にど

のようにやりくりしながら自己形成するののかという点に、人間の主体性を考える重要な要素があると考え。そこで本研究ではこのパンデミック中に米国の大学で日本語教育を経験した学習者たちが個々の絶望的な状況にどのように向き合ってきたのかを調査し、その中から人間の「エージェンシー」や主体性を明らかにする。

4. 研究の方法

パンデミック中にとある米国大学で日本語を学んでいた学生3名にインタビュー調査を行い、そのライフヒストリーを辿った。目的は対象者から個々に当時の生活・家庭環境、人生の出来事を詳細に情報を収集して、価値観や絶望の理由を把握することである。テーマは、大学でのクラスを受講していた際には話しにくかった、または客観的に状況を説明できなかった個人の生活環境に関することである。調査のゴールは、インタビュー結果から「絶望を乗り越える学習」を見つけ出しプロセスを分類することである。

4-1. 調査の対象

米国大学に通う3名の学生は、筆者が勤務する大学の日本語クラスを受講していたことがある。筆者はこの学生たちと面識があり、受講時期から葛藤があったことを耳にしていた。その葛藤を克服したこと、現在の生活が落ち着いているということから、この3名が今回のテーマの対象者として適切だと判断した。受講時期にはバラつきがあり、お互いの事情は知らない。本稿ではこの3名をAさん、Bさん、Cさんと呼ぶことにする。以下に3名の概要を記す。

Aさん：大学入学前から日本への留学を夢見て、そのために大学選びも行った。入学後、期待を膨らませプログラムに毎年応募し、合格を喜ぶ。それも束の間、パンデミックにより留学直前になるとキャンセルされるというのが続き、精神的にも疲れ夢と希望を見失う。

Bさん：同じく大学生活の一つとして留学を楽しみにしていたが、パンデミックのためキャンセルが続く。卒業時期になり留学が物理的に叶わなく、入学した意味や人生を自問自答する日々を送る。家庭環境が好ましくないが、パンデミックにより在宅を強いられることでさらに精神的なバランスを崩す。

Cさん：留学をしていたが、パンデミックのために強制的に母国に引き返された学生である。瞬時に生活が一変し、それまで努力して培ってきた日本での人間関係、暮らし、仕事などが失われる。計画や期待が裏切られる中、家庭環境の悪化、Black Live Mattersの事件により精神が悪化する。

対象者に共通していることは、3名とも日本語を勉強していたことである。年齢や学年は様々であるがそれぞれ大学生活への期待とパンデミックによる現実とのギャップを感じながら生活をして

いた。また3名とも日本への留学への関心が高く、それが希望、楽しみ、生きがいとなっていた。その留学プログラムがパンデミックにより中断／中止になったことが大きな影響を与えている。

4-2. 調査の方法

調査は、2023年2月に対象者1名ずつオンラインでインタビューを行った。インタビューは、Zoomを用いて非構造化の深層インタビューを実施した。インタビューは被験者3名の了承を得て録音し、筆者が文字起こしをして文面化した。また使用言語は日本語でも英語でもよいとし、筆者からの質問は日本語で行った。なお3名とも主にインタビューを日本語で回答していたが部分的に英語を交えて答えていたケースもあり、本稿ではそれを筆者が日本語に翻訳したものを掲載している。研究成果の公表方法についての同意も得ている。

5. ライフコース

以下では、3名のインタビューの結果を人生の時系列で整理する。また収集した情報を再構築し、筆者の説明・解釈も織り交ぜながらまとめている。

5-1. パンデミックが及ぼした個人への影響と希望の喪失

Aさんは、大学入学前から留学を目標の一つとしていた。パンデミックはその目標を先に送らせ、未来への不安を煽り続けたことがわかる。

Aさん：このパンデミックにより留学プログラムが何回もキャンセルされ、とても不安でいつも悩んでいました。毎回キャンセルされて次の次の年のプログラムも応募して、どんどん期待しても急に中止のお知らせが来て、絶望するという繰り返しでした。この何年間はずっと期待と絶望の繰り返しみたいでとても辛かったです。この夢を叶えるまでは次の目標も考えられなく、前に進めない状況が続きました。この目標は大学に入らずと前から何年も計画していたもので、そのために選んだ大学だったので余計に。

Bさんの人生にもパンデミックは大きく影響した。学業の目標を失うだけでなく、自宅での自己隔離期間やコンピューターに向かう生活がバランスを崩す原因になっている。

Bさん：大学生活をととても楽しみに入学したのに、パンデミックがありキャンパスライフはなくなりました。もう大学に行ってる感じは全然なく、友達も作れなかったし、人とも対面で会って話せませんでした。趣味も楽しいことも学校も、全部オンラインになりました。日々の生活全てがパソコンで行われ、さらに家を出ることもできなくなって、すごく精神的に大変でした。両親との関係が良くなって、それまでは学校に行ったり友達と外出することで回避できていた

ことができなくなり、苦しい状況が続きました。留学をする予定だったけどそれもキャンセルになり、もう希望も楽しみもなくなりました。学校に対するモチベーションが完全に消えてしまいました。

Cさんも同様に留学を楽しみにしていた一人である。上記の2名と異なり、Cさんは留学をしていた。そこからの生活環境の変化により絶望を感じていた。

Cさん：私は英語、スペイン語、韓国語、中国語、そして日本語が話せます。もっと世界的な視野が欲しかったから留学しました。もっと他の文化について学びたかったです。夏に中国での留学をして、そこから日本に行き東京での留學生活が始まりました。1年間の留学プログラムで、最初はたくさん食べて旅行して友達と遊びました。数ヶ月後にはアルバイトも始め、充実した日々を過ごしていました。最初はコロナが始まって日本人はあまり気にしていなかったようで、私もそこまで心配していませんでした。しかし、状況は急変しました。突然、留学していた環境から強制的にアメリカに呼び戻されたんです。日本に住んでいた時は一番嬉しかったです。1週間前には日本の生活を満喫していて、次の週にはアメリカに戻ってオンライン授業を受けている、それは恐ろしい変化でした。その後の生活は最悪でした。色々なことが同時に起こって、頭がパンクしそうでした。学校のオンライン授業は選択肢はなく憂鬱、それに家族の中でもトラブル続きで、例えば兄の体調が悪くなりサポートが必要でした。祖母も同じように健康に支障が出ました。また叔父が急に亡くなりました。そして気づいたら私は家庭内の伝言・サポート係になっていました。私にだって解決すべき問題や悩みはありましたが、誰もそれどころではありませんでした。私はある日、交通事故に遭って、もう少して命を落とすところでした。さらに当時 Black Lives Matter もあり、もう何が何だかわからなくなり、息をする余裕もありませんでした。本当に辛くて、脳みそが潰れるかと思いました。

5-2. 絶望を救ったもの：ナラティブからの考察

この絶望の日々を学生たちはどのように過ごしていたのか。学業に身が入らず、集中できないなどの状況の中、3名はそれぞれの方法でバランスを取ろうと試みている。その共通点は友人や知人、恩人との会話である。電話やSNSでのコミュニケーションツールを使い、情報交換や励まし合いをすることが彼らにとっての大きな支えとなっていたという。Emirbayer & Mische (1998) は、ライフコースの観点において、「エージェンシーとは自分の人生の舵を取り、自ら進んでいく方向を決める力、能力である」と定義している。そして Biesta & Tedder (2007) は、ナラティブがエージェンシーの達成に大きな役割を果たしていると指摘している。自分の状況を人に伝えたり、積極的に人と語り合ったり、または人と人とのコネクションを作ることによって自分を客観的に見ることができ、エージェンシーの意識化につながる(武田, 2022)。3名はパンデミック中の絶望からどのように

エージェンシーを保ち続けたのかを考察する。

Aさん：学校の友達と話すことが大事でした。例えば日本に留学したいという同じ夢を持っている友達は、自分の気持ちをよく理解してくれました。どんなに努力してもいつも将来が不安で悲しすぎると思っていたけど、同じ状況の人はその気持ちをわかってくれたから、同じ気持ちの人がいるとわかると少し安心、というか悲しみが少しだけ減りました。そして「いつか絶対に日本に行く」と決心しました。いつか、いつかきっとできると信じていました。同級生にも同じ夢があるから、その人たちと一緒に話していると絶望がちょっとだけ和らいだと思いません。

Bさん：授業が全てオンラインになり、私の唯一の楽しみは友達と電話することでした。しかし唯一の楽しみである友達との会話だって、内容な憂鬱なものばかりになっていきました。いくつかの友達は大学を中退したし、自殺未遂をした友人もいました。こんな悲しい毎日で、学校の勉強なんて集中できないのは当然でした。私は高校生の時から家庭の問題があって家に帰りたくありませんでした。高校の時から、日本語の勉強には多くの時間と労力を注いできました。日本語の先生は私に勉強することの楽しさを教えてくれました。日本語は私が1から勉強した言語です。私よりも年上の人にとって難しい言葉がわかるようになり、日本から来た留学生とその人たちの母語で話せるようになるってすごいと感動しました。学校で他の授業でもこんな気持ちになれるのかなと、勉強に対する興味が出ました。放課後はよく日本語の先生のお手伝いをしたり話したりするようになり、日本語のクラスは勉強の楽しさだけではなく私に居場所を与えてくれました。そして、学校で勉強を頑張ることには意味があるという価値観も教えてくれました。それは私にとって特別でした。パンデミックが起きて私の人生は本当に辛かったけど、その価値や学びを捨てたくないと思いました。その先生とは今でも毎週話したり日本語クラスのお手伝いに行ったり、一緒にスポーツをしたりしています。パンデミック中もその先生はいつでも同じ場所において、話を聞いてくれて新しい価値観やものの見方を教えてくれました。そのおかげで、なんとか乗り越えることができました。だから感謝しかありません。

Cさん：私の絶望は2年くらい続きました。もう学校を辞めたい、勉強したくないと思ったこともあります。サポートになったのは、セラピー、お灸、漢方、運動、友達、セルフケアだったと思います。例えば自分の好きなことをするとか本当に楽しいと思えるクラスを取るといったことです。また友達との時間は特別でした。パンデミック中、近所の川辺で友達とよくスケートティングをしました。夕方、夕飯の後とかに友達とスケートして話したことが私にとっての癒しでした。友達と似ている状況があったので、同じような困ったことを話し合えたことが大きなサポートでした。コロナに関する問題、不安なども話せましたし、日本で出会った友達とは

親友になり、多くのことを話しました。いくつかのクラスでは単位を落としましたが、日本語の授業は続けられました。クラスメートと一緒に作業ができるしクラス的环境はとてもよかったので、私は授業に参加することが好きでした。他の学生のことを知るきっかけ作りを先生はたくさんしていましたし、学生のしたいことも取り入れてくれました。クラス開始時に質問タイムを作ったり、自分のことを話す時間も作ってくれました。それによって自分のことも言え、クラスメートの話すことにも興味を持てました。オンライン授業の中で卒業してからも連絡を取り続けているのは日本語クラスの人だけです。コネクションが感じられました。

3名はそれぞれの状況で、人との交流、対話に救われているようにみえる。絶望的な状況でも、誰かとつながり感情を共有または表現することで自身を守ってきたようだ。それが同じ境遇の人であれば、辛さや困難な課題を分かち合い共感できたことでそれが癒しや安心につながっている。また、絶対的な信頼と尊敬の念を持った人物との定期的な会話も、精神的な安定をもたらしている要素であるといえる。これらの支えにより、3名は人生の舵を取り続け、自ら進んでいく方向をしっかりと定めている。

5-3. 夢を叶えるためのエージェンシー：現在の姿

パンデミック中の日本語コース終了後、3名はどのように次の道を切り開いていったのか。彼らの強いエージェンシーによって、絶望的な生活から一転、新しいステージにいる。

Aさんは、留学の夢が諦められず卒業を遅らせることを決断した。留学プログラムに再度申し込み、無事に日本での生活をスタートさせた。現在は日本の大学に通いながら飲食店でアルバイトもしている。念願の夢であった日本での生活、キャンパスライフ、アルバイトが実現し、喜び・充実感に溢れた日々を過ごしている。

Aさん：日本語という自分にとって新しい言語がペラペラになるのは、本当に自分にとって大きな満足感があります。何年も前は全然知らなかった言語を使い、その国で色々な人と会話ができアルバイトして稼げている。それは自分自身の非常に大きな成長です。実は先日、人生で初めてアレルギーで目が痛くなるという経験がありました。日本で病院に一人で行くのは怖かったのですが周りの人に勧められて診察してもらいました。全部の説明を日本語でし、薬局で薬をもらったらすぐに治りました。今日本で生活をしているということを実感し自分の成長が感じられた瞬間でした。

Bさんも、同じく留学がキャンセルになったケースである。大学に入る前から楽しみにしていた留学プログラムなのに、中止が続き卒業時期がきてしまった。どうしても夢が諦められず悩み続けたが、卒業後、自分の夢を叶えるために正規の学生として日本の大学院に応募した。そして努力が

報われ見事に合格した。もうすぐ希望していた大学生活が始まる。生活に希望の光が差し、新しい環境を心待ちにしている。

Bさん：卒業は思ったより早く、その前に自己満足のために友達を作ったり遊んだりするのが頑張りました。卒業してからは日本の大学院に入るために入学試験の勉強を頑張り、希望していた大学院に合格することができました。寮に住むことになりそうですが、まだ住居については決定していません。ただ、どんなに忙しくても、何があってもどんな仕事についても日本語を学び続けることを辞めたくないです。それは人生で変わらない気持ちだと思います。日本語の勉強をすることは自分に喜びを与え、日本人と話すことや文化を学ぶことは新しい世界を教えてくれました。まるで暗闇の中に光を差ししてくれたみたいでした。だからどんなに大変でも、この幸福感を忘れたくはないです。

Cさんは、既に日本へ留学をしていたが、パンデミックによりさまざまな計画や期待が裏切られると共に家庭環境や社会的抑圧などで精神的に辛い状況を経験した。卒業後、学業というプレッシャーから解放され、少しずつ自分を取り戻した。それにより家庭での状況も改善し精神のバランスが取れるようになったという。Cさんも同様、次のステージとして進学を希望し大学院に申請中である。パンデミック中に見つけた環境問題への興味をさらに深く学びたいという想いと「言語を使って仕事がしたい」という想いを形にするために自分を成長させられる道を選択した。

Cさん：中国と日本に留学しましたから、すごく深いコネクションがありました。日本に住んでたこととか、新しい文化を経験した事とか、その気持ちを大切にしたいと思いました。今でも日本に住んでる友達があります。その日本とのつながりを維持したいと思いました。将来、夢、友人など全てにおいて、日本語が大事だと感じます。私は外交的な性格だし、将来国際的に働きたいという夢があるし、日本が大好きだし、だから日本語をこれからも学び続けます。韓国語も勉強を続けたいと思っていますが、新しい言語を学びたいというより今まで学んできたことをもっと深く構築したいと考えています。日本語のクラスでは日本語を使って日本人の役に立つプロジェクトをしました。またサステナビリティに関するクラスも受けたので、環境に対する興味が出ました。だから大学院に行くことを考えました。お金も高いですし、時間もかかりますので大変ですが。私の将来のゴールは、国際的な舞台上で、人と人をつなげることです。私の言語能力を使って人を紹介し合ったり世の中の役に立ちたいです。それが私の使命だと思っています。

6. 考察

この3名が絶望しなかったのはなぜか。言い換えれば、パンデミックによる「断絶」の経験を乗り

越えた学習とはどのようなものなのか。

ジャービス(2020)によると、「断絶」にはいくつかの段階がある。1つ目は「一致(coincidence)」であり、世界を当然視し、経験を意識していない状態である。2つ目が「不一致(divergence)」であり、多少の違和感が生まれ、自分の振る舞いを無意識的に修正するが、世界に対する自分の理解を変えなければならないほどではないという状態である。3つ目が「分離(separation)」であり、ギャップが大きくなり現状に対して疑問を抱くなど意識的な学習が生まれる状態である。4つ目が「乖離(distinction)」であり、ギャップがあまりにも大きいために、ギャップを埋めるための何らかの学習をしなければならないと思う状態である。しかしギャップがあまりにも大きいと「何をしても埋められない」と感じてしまい、意味ある経験にはならず、まったく意味のない経験(諦めるなど)になってしまうこともあるという(ジャービス, 2020, p.128)。

今回の3名については日本語学習を継続しながら希望を捨てなかった。ジャービスでいうと「乖離」ではないということが重要である。そして彼らは諦めることなく、意識的に日本語学習を継続したことになる。このように「断絶」を意識的に解決しようとする過程に3名の主体性と学習が存在している。「断絶」に直面する時に、その学習は葛藤を含んだものになる。ジャービスはこのように断絶経験の中で感情同士が葛藤したり、理性的な思考と感情などの間で葛藤する学習の特徴を「両面価値(Ambivalence)」と呼んでいる(ジャービス, 2020, p.134)。断絶からアンビバレンスな状態に陥りつつも、希望を捨てなかった3名の学習の特徴として、次の5点が指摘できる。

第一に、同じ境遇の人々との共感的な会話による知の構築である。AさんとCさんにとって、同じ日本語クラスでオンライン授業を受講しているクラスメートというのは境遇に共通点がある。例えばAさんは、留学がキャンセルになって辛い、希望が見えない、でも夢を叶えたいと願う人と友達になり、共感的な会話をすることによって絶望的な感情が和らいだと話している。またCさんもクラスメートや学外の友達に自分のことを聞いてもらったり相手のことに興味を持ったりすることで深い友情関係、信頼関係が築かれ、共感的な会話によって知を構築するプロセスを踏んでいる。Bさんも家庭でのトラブルや絶望的な心理状況を共有しながら、同じ境遇の友達と共感的な会話をしていたと語っている。

第二に、授業以外の場、もっと言えば学外での共感的なコミュニケーションが重要な役割を果たしていた。3名とも授業以外でも関係性が形成されていて、学業とは切り離れた個人レベルでのつながりを持っていたと観察できる。「レジリエンス」を強化するものは脱集中化や多様性と指摘されている(ゾッリ&ヒーリー, 2013; 枝廣, 2015)。日本語クラスの授業内のみでコミュニケーションが完結していたのではなくそれ以外の場にも広がっていたことが、パンデミックにともなう「断絶」に対してレジリエントな学習を可能としたといえる。しかしながら日本語クラスが学外も含めた授業以外の場でのコミュニケーションの創造や活性化にどのように関連したのかは今後の検討課題である。

第三に、日本語クラスを通して形成されたネットワークは、協働的な学習を支援するだけではな

く、3名にとってのソーシャル・サポートとしても機能していた。枝廣(2015)は、レジリエンスの構成要素として「自己肯定感」「楽観的な思考」「問題解決スキル」「ソーシャル・サポート」の4つを挙げているが、3名の事例からは日本語クラスを介して生まれた学生や教師との関係が、とりわけ心理的なサポートとして機能していたことを確認できる。日本語学習を通して友人や教師との関係が維持され、そのことによって日本語学習もしくは日本語クラスそれ自体が心の拠り所、居場所となっていたといえる。保坂ほか(2021)は、「社会的存在感」とそれを支える「教授的存在感」を合わせて「プレゼンス理論」と呼んでいるが、パンデミック中、3名は教師やクラスメート、自分自身の存在感を意識し、それが連帯感となり相互交流の質と量を向上させ、学習の継続と学習効果をもたらしていたといえる。

第四に、過去の学習経験の蓄積がある。この3名はパンデミック中だということにも関わらず、日本に留学するという夢、または日本での留学生活に戻りたいという希望を捨てなかった。こうした思いは葛藤を含むものであるが、それでも留学に対する前向きな感情を抱き続けられたことは、過去の学習経験の蓄積の影響である。具体的には「努力した経験」がある。AさんもBさんも、留学プログラムがある大学探しを始める前から日本語の学習をしていた。そして留学を実現することをモチベーションに、学業やその他の人生設計に労力を費やしてきた。これを達成させることが彼らのエージェンシーにつながり、努力した想いがリベンジへの強い闘志を燃やしているようである。Cさんは既に留学していてそこでの人間関係や学習が既に存在していた。また留学前からの日本語の学習経験もあり、やっと叶った夢とそこでの努力の賜物を放棄できなかった。そこでの経験と学習を将来の自分の肥やしにしたいという思いが希望を絶望から救った。

Aさん：実はそのプログラムが中止された時、その「行きたい」という気持ちがもっと強くなりました。すぐに叶わなかったので余計に「もっと行きたい」と思ってしまった気がします。最初は旅行に行くような感覚でしたが、毎回中止されて、その厳しい状況と戦いたいという自分を発見しました。自分にもコロナにも負けたくないという気持ちが強くなって、日本語を最後まで勉強したい、夢を実現させたいと思うようになりました。

第五に、留学のための「手段」としての日本語学習の維持である。留学が見通せない、または留学に戻れないという状況にあっても、留学が完全に諦められることはなく、留学を実現するための手段として日本語学習が維持されていた。このように留学のための手段として日本語学習が希望を失わなかったのは、1つには彼ら自身のそれまでの努力と自分への自信によるものである。もう1つには、パンデミックにおいても日本語を学び続けること自体が希望を作り出していたということである。

おわりに

3名は日本語クラスを受講したという共通点があるが、絶望的な境遇から抜け出し、自ら希望を持って進むという強いエージェンシーを持っていることも共通しているといえる。ここから見えるパターンとして、「努力した経験」が自己効力感を生み、それによって日本語を学ぶことの喜び、運用することの楽しさ、そして自分を信じて前に進むエージェンシーが生まれている。3名ともパンデミックにより絶望的な状況へと追いやられ、留学や大学、人生への疑問を抱いていた。しかし、その絶望的な経験を経て、自身にとって大切なもの、価値観、能力に気が付き、それが「学習」となっている。その大切なものを守るため、またはそれをさらに高めるために次のステージへ向かっている。Aさんは日本語学習について「自分の成長を感じる術であり、達成感」だという。Bさんは「居場所であり、幸福感であり、一生守り続けたいもの」だと話す。Cさんは日本語学習を「自分と友人、そして夢をつなぐツール」だと語る。彼らにとって、日本語の学習は、希望であり生きがいである。

【参考文献】

- 枝廣淳子(2015)『レジリエンスとは何か一何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる一』東洋経済新報社.
- 小泉令三(2020)「社会性と情動の学習(SEL)と教育的公正—アメリカでのCASEL SEL-EXCHANGEの資料をもとに—」『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報』10, 45-49.
- 桜井茂男・桜井登世子(1992)「大学生における絶望感および抑うつ傾向と原因帰属様式の関係」『奈良教育大学教育研究所紀要』28, 103-108.
- 佐古恵里香(2022)「コロナ禍における日本語学習者の現状と課題に関する一考察」『国際言語文化学会 日本学研究』7, 91-105.
- ジャービス, P (渡邊洋子・犬塚典子監訳)(2020)『成人教育・生涯学習ハンドブック—理論と実践—』明石書店.
- ゾッリ, A / ヒーリー, A. M (須川綾子訳)(2013)『レジリエンス復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か—』ダイヤモンド社.
- 武田泉(2022)「米国大学卒業後の日本語学習者のエージェンシー—日本で起業した学習者の事例—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』71(1), 1-14.
- ヒューマンアカデミー (2021)「コロナ禍における日本語教育の変化」Accessed February 2023, <https://manabu.athuman.com/blog/kaisha/post_21.html>
- 保坂敏子, 犬伏翔, 鈴木ちひろ, 村田恵美, 藪内邦久, 島田めぐみ(2021)「海外の日本語教育におけるコロナ禍への対応—プレゼンス理論の観点から振り返る—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.22, 203-214.
- 保坂敏子(2020)「日本語教育における遠隔教育—オンライン授業のデザイン指針を探る—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』21, 177-188.
- 星友啓(2022)「アメリカ教育のトレンド「SEL」とは?」, Accessed March 2023, <<https://tomohirohoshi.com/?p=410>>
- AAUP.(2022). *The Annual Report on the Economic Status of the Profession, 2021-2022*. American Association of University Professors, accessed March 2023.

- <<https://www.aaup.org/report/annual-report-economic-status-profession-2021-22>>
- Beck, A. T. (1972). *Depression: Causes and treatment*. Philadelphia. University of Pennsylvania Press.
- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. (1974). The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.
- Biesta, G., & Tedder, M. (2007). Agency and learning in the lifecourse: Towards an ecological perspective. *Studies in the Education of Adults*, 39 (2), 132-149.
- Brener, N. D., Kann, L., Shanklin, S., Kinchen, S., Eaton, D. K., Hawkins, J., & Flint, K. H. (2013). Methodology of the Youth Risk Behavior Surveillance System - 2013. *Morbidity and Mortality Weekly Report: Recommendations and Reports*, 62 (1), 1-20.
- Cameron, Margaux, et al. (2021). *2019-20 National Postsecondary Student Aid Study (NPSAS:20)*. Institute of Education Sciences, Accessed March 2023, <<https://nces.ed.gov/pubs2021/2021456.pdf>>
- CASEL. (2017). *Fundamentals of SEL*. Accessed March 2023, <<http://www.casel.org/what-is-sel>>
- Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning. (2012). *2013 CASEL guide: Effective social and emotional learning programs, preschool and elementary school edition*. Chicago, IL: Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning
- Emirbayer, M., & Mische, A. (1998). What is agency? *American journal of sociology*, 103 (4), 962-1023.
- Jensen, Anabel. Freedman, Joshua. Stillman, Susan. (2010). *A case for emotional intelligence in our schools*. Six Seconds. Accessed March 2023, <https://prodimages.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf>
- Stotland, E. (1969). *The psychology of hope*. San Francisco; Jossey-Bass.
- Weissberg, & T. P. Gullotta (Eds.), *The handbook of social emotional learning* (Kindle Digital). New York, NY: Guilford Press.

Japanese Class that can Reduce Hopelessness from the Pandemic

Izumi TAKEDA

(Doctoral Program, Graduate School of Education, Tohoku University)

During the pandemic, universities switched from in-person to online classes, significantly affecting students' mental health and everyday routine. Previous research has focused on enrollment decline, economic damage, effective online teaching, and the importance of social and emotional learning. In the United States, there were college students pushed into desperate situations and expressing hopelessness due to the pandemic. This paper focuses on how students overcome and grew as individuals while dealing with the harsh experiences and challenges in their lives. The author conducted in-depth interviews with three college students taking Japanese classes at the university in U.S. The goal of this paper is to analyze their life stories and identify the process of which they were able to overcome the difficult situations instead of succumbing to despair based on the interview results. The author reveals their agency that kept them moving forward positively to achieve their goals and investigates how the students dealt with their individual situations of despair.

Keywords : Pandemic, Hopelessness, Japanese Language Education, Japanese Classes, Agency

